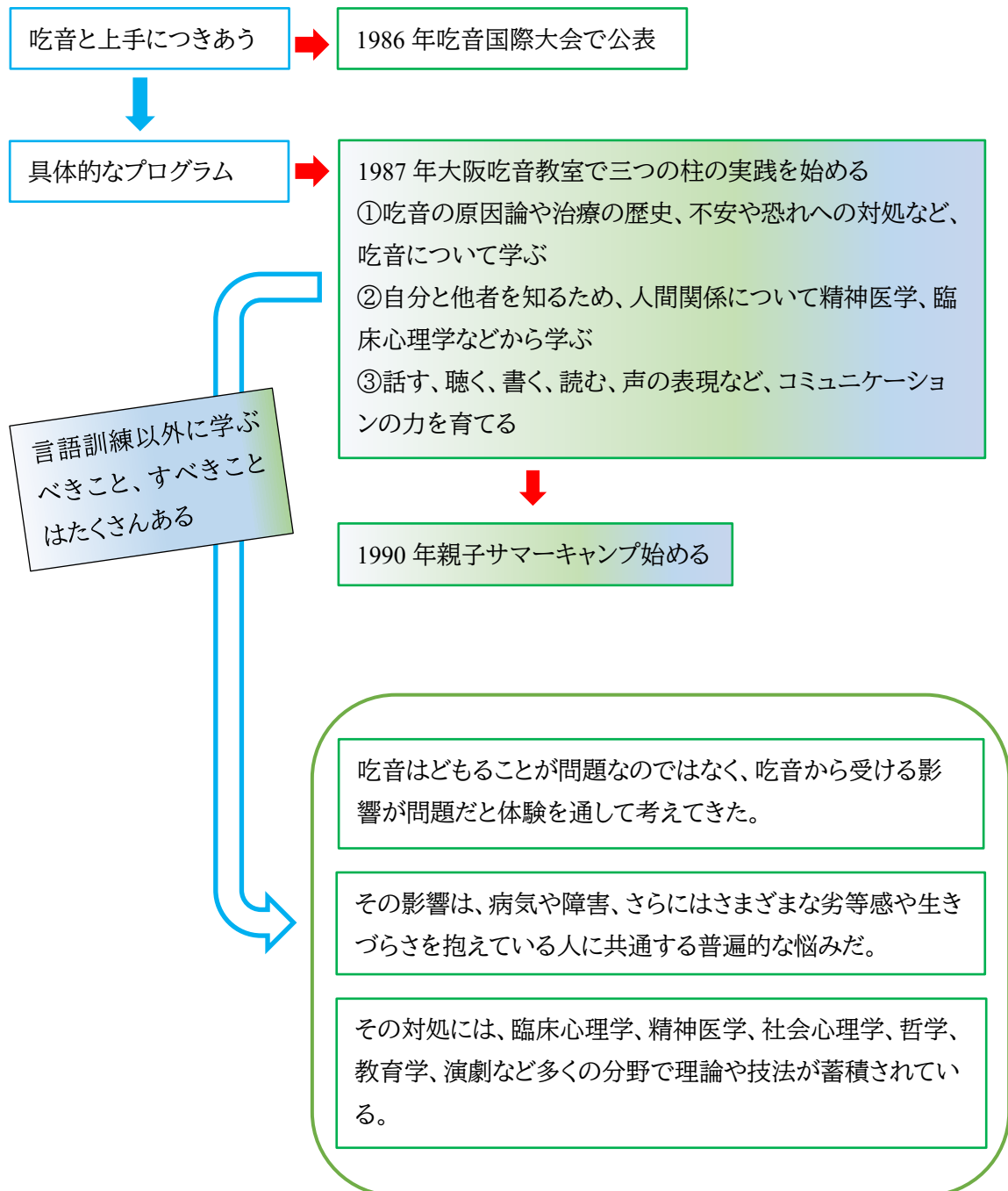


『どもる子どもとの対話 ～ナラティブ・アプローチがひき出す物語る力～』 1章図解

1章 ナラティブから読み解く、吃音の特徴と吃音問題の本質

№1 吃音とともに生きる (P28)



№2 吃音の多様性と変動制(P35)

一人ひとりちがう、吃音の多様性

- ・音を繰り返す「ぼぼぼぼく」と(連発)
- ・第一音が詰まる「……、」と(ブロック、難発)
- ・音の引き伸ばし「ぼ〜く〜」と(引き伸ばし)



繰り返しから、引き伸ばし、ブロックへとどもり方が変化することが多いが、どもり始めからブロックの子もいる。

三つのタイプのすべてが「どもる」ことなので、「詰まったり、どもったり」と分けなくて、「どもる」と表現してほしい。

- ・話す場面や相手によってどもる
- ・特定の「音」だけどもる
- ・どもり始める年齢がさまざま(幼年から老年まで)

どもる人一人ひとりがちがう、吃音のどもる状態の多様性だ



「吃音症状」は、一度改善されても元に戻ることの多い、脆弱性のあるものだ。多様性と変動性の大きい吃音に、一律の言語訓練はあり得ない。



どもる状態、困ること、将来への思いなど、知っているのは本人だ。

どもる子ども

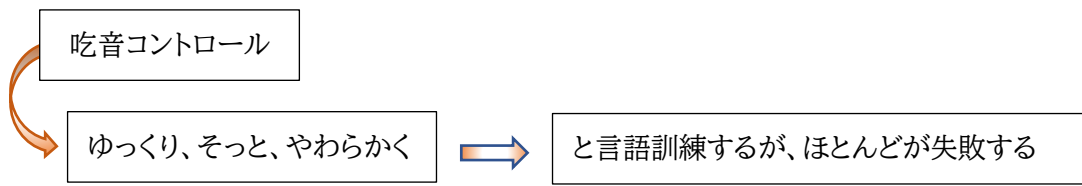


親、ことばの教室の担当者や言語聴覚士は「無知の姿勢」で、子ども一人ひとりと対話して教えてもらうしかない。そして、専門家として知り得た知識はすべて親や子どもと共有し、対等の立場で、今後取り組む道筋を一緒に考えるのが、多様で、変動性の大きい吃音に対する取り組みの基本的な態度だ。

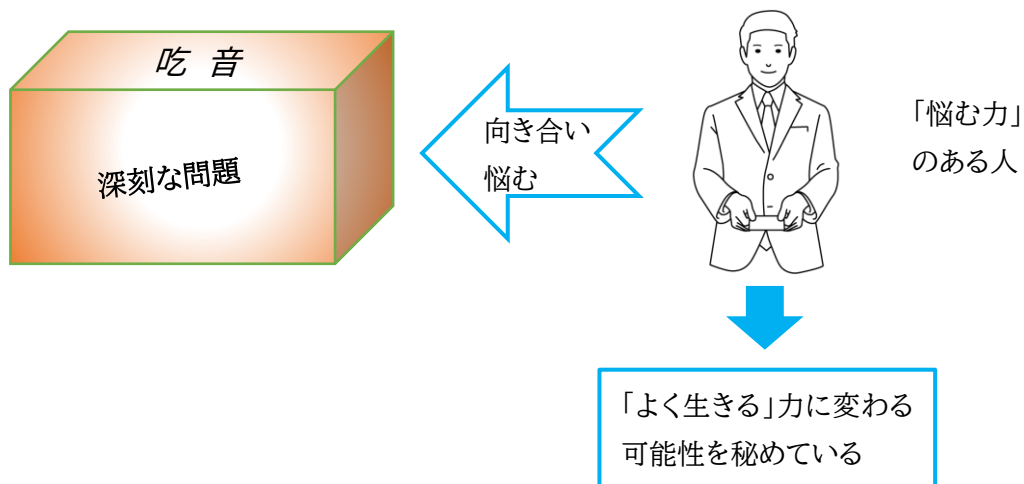
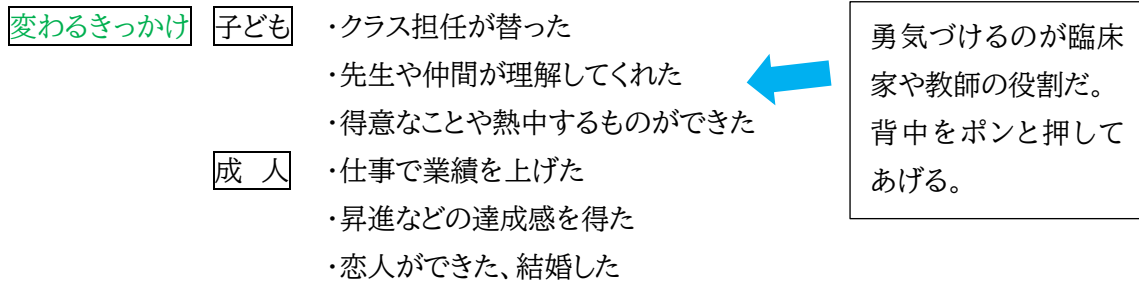
私見
どもる大人
の場合

どもる人が生きていくには、どもりを治そうとすることではなく、「三つの柱」に沿った学びを重ね「吃音とともに豊かに生きる」術を体得することなのだろう。

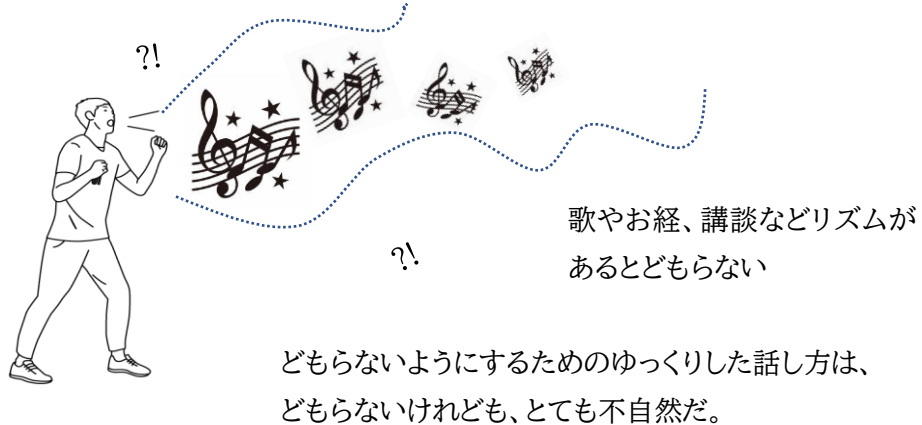
№3 吃音は治っていないが、自然に変わっている (P38)



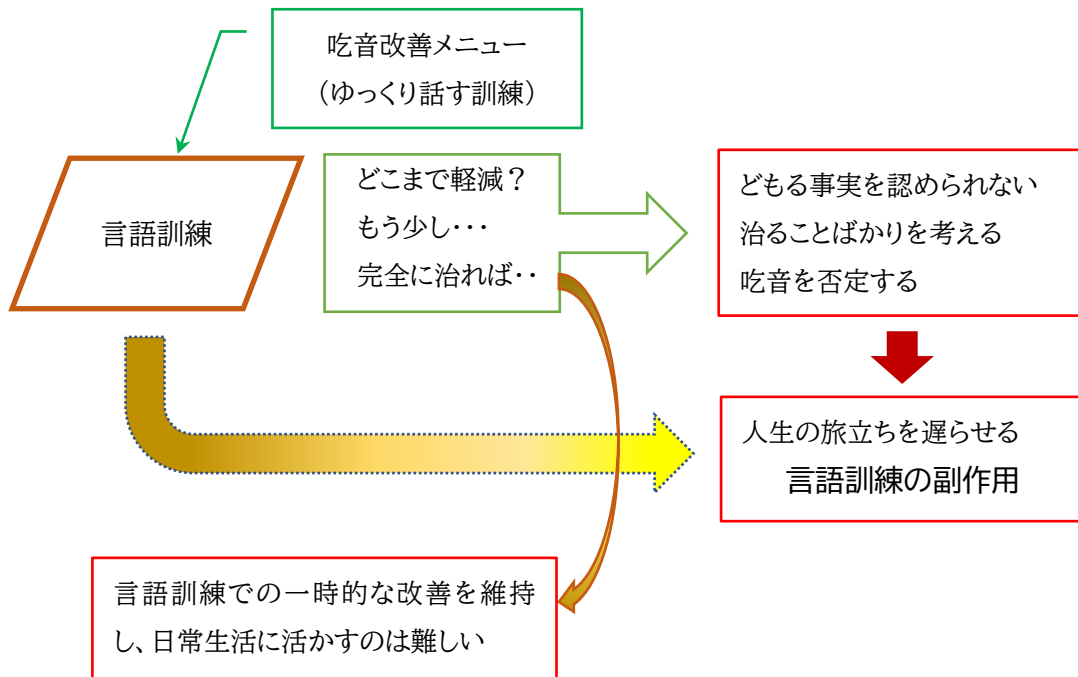
しかし、言語訓練はしていないが、仕事を誠実にしていくなかで自然に変わっていくことがある。



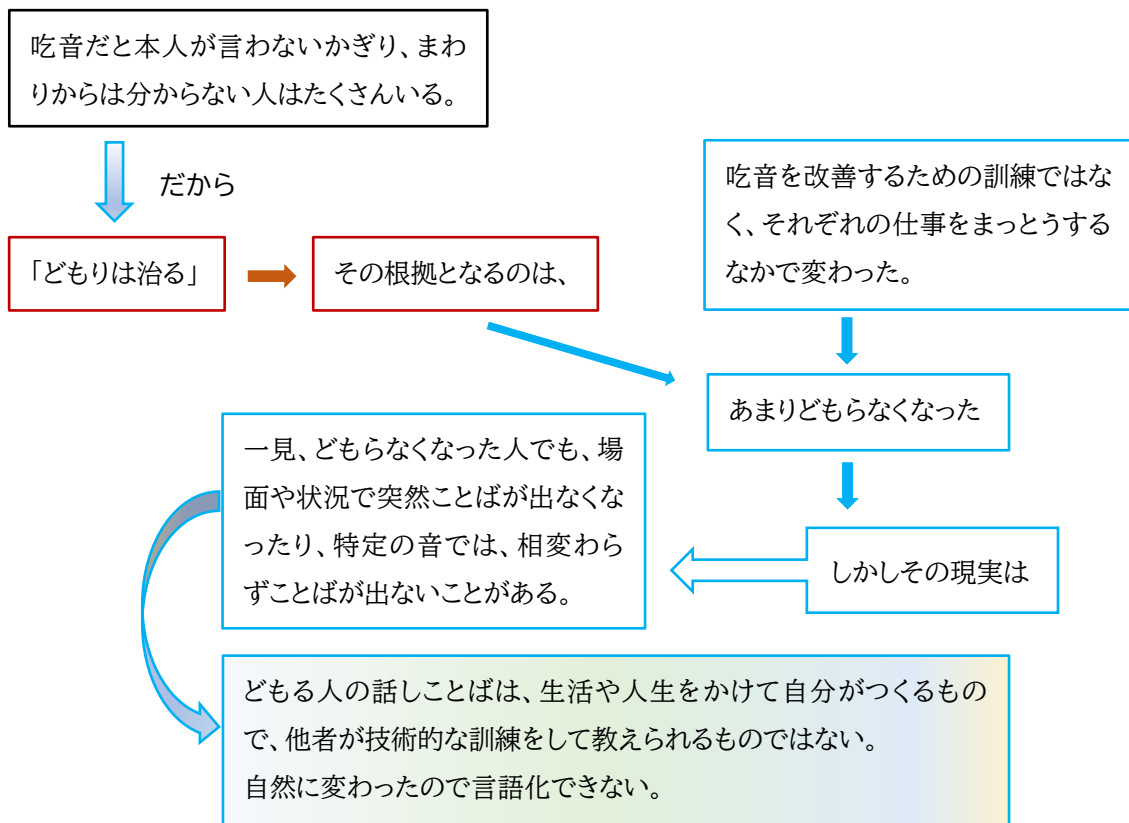
№4 歌や極端にゆっくり話すなどのリズムがあれば、あまりどもらない (P40)



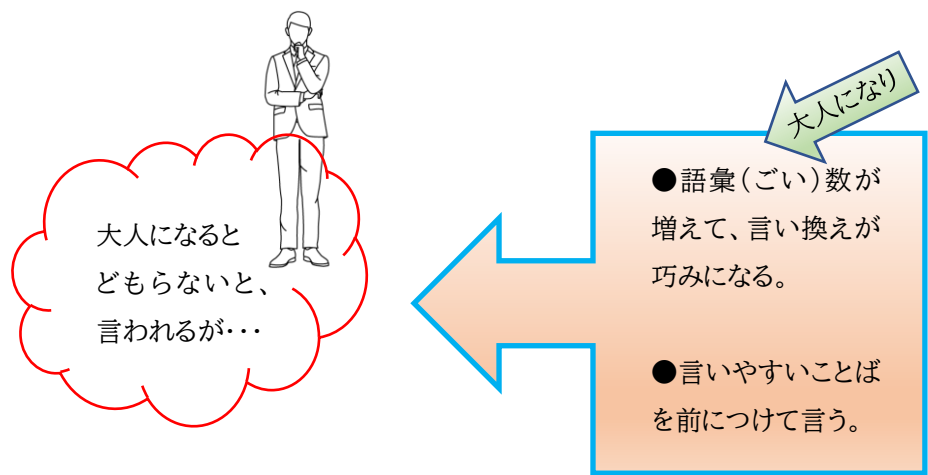
№5 言語訓練の問題点と副作用 (P41)



№6 どもらなくなった人びとの現実 (P42)

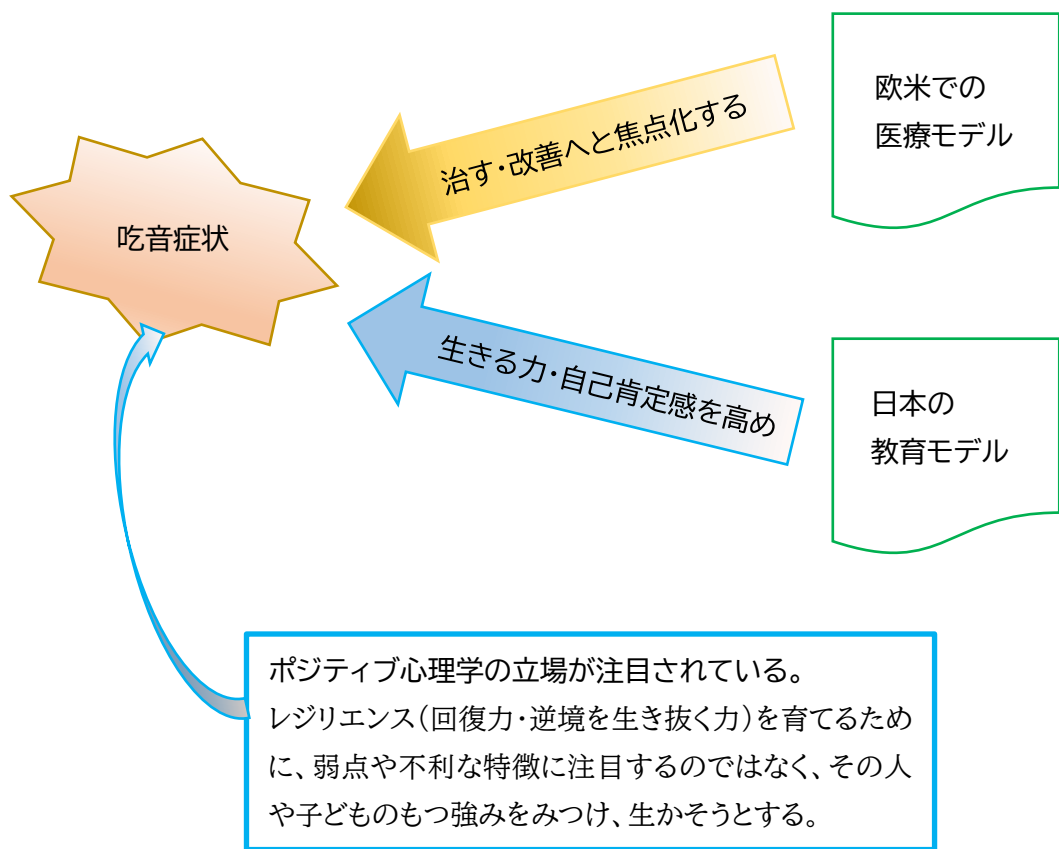


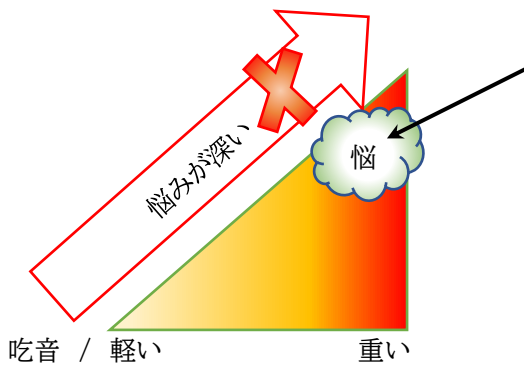
№7 どもる人のことばの言い換え (P44)



言い換えは工夫であり、サバイバル術だ。
言い換えをしていない人などいない。
言い換えを気にしないで気楽に生きよう。

№8「吃音症状」の改善に焦点をあてない(P45)





どもる人のすべてが悩んでいるわけではなく、多くの方が明るく積極的に生きている。一方、伴侶が気づかない程度でも、深く悩んでいる場合があり、吃音の程度と、吃音からくる影響や悩みが必ずしも比例しない。

「吃音」が他の「病気や障害」と違う点

- ① 病気や障害は「障害受容」しても生活上の困難さは変わらない
- ② どもることを認め ⇒ どもる覚悟さえあれば ⇒ できないことはほとんどない
- ③ 「どもらないで電話」をすることはできないが、「どもって電話」することはできる

どもる人を三つに大別する

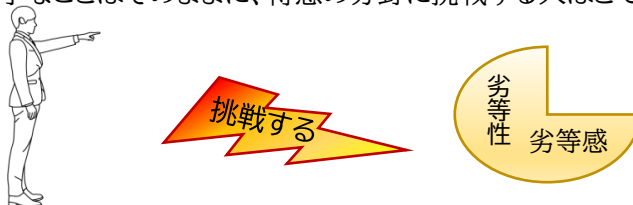
① あまり劣等感をもたずに生きている人

多くの人と出会った経験から、70%以上の方があまり悩まずに、あるいは、悩んだとしても折り合いをつけて、さまざまな仕事に就いて自分なりの幸せな人生を送っているのではないかな。



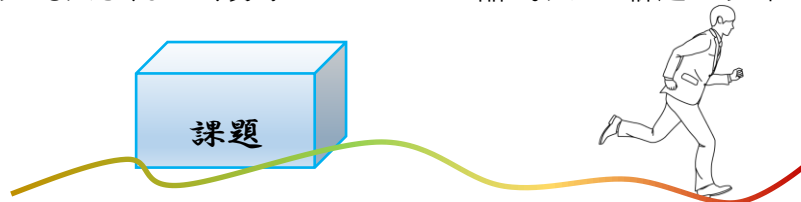
② 劣等感の補償 = 劣等感をバネにしてとてもがんばる人

劣等性や劣等感をもつことにあえて挑戦し、話す仕事に就く、劣等感の直接的補償をする人が少なくない。一方、苦手なことはそのままに、得意の分野に挑戦する人はとても多い。

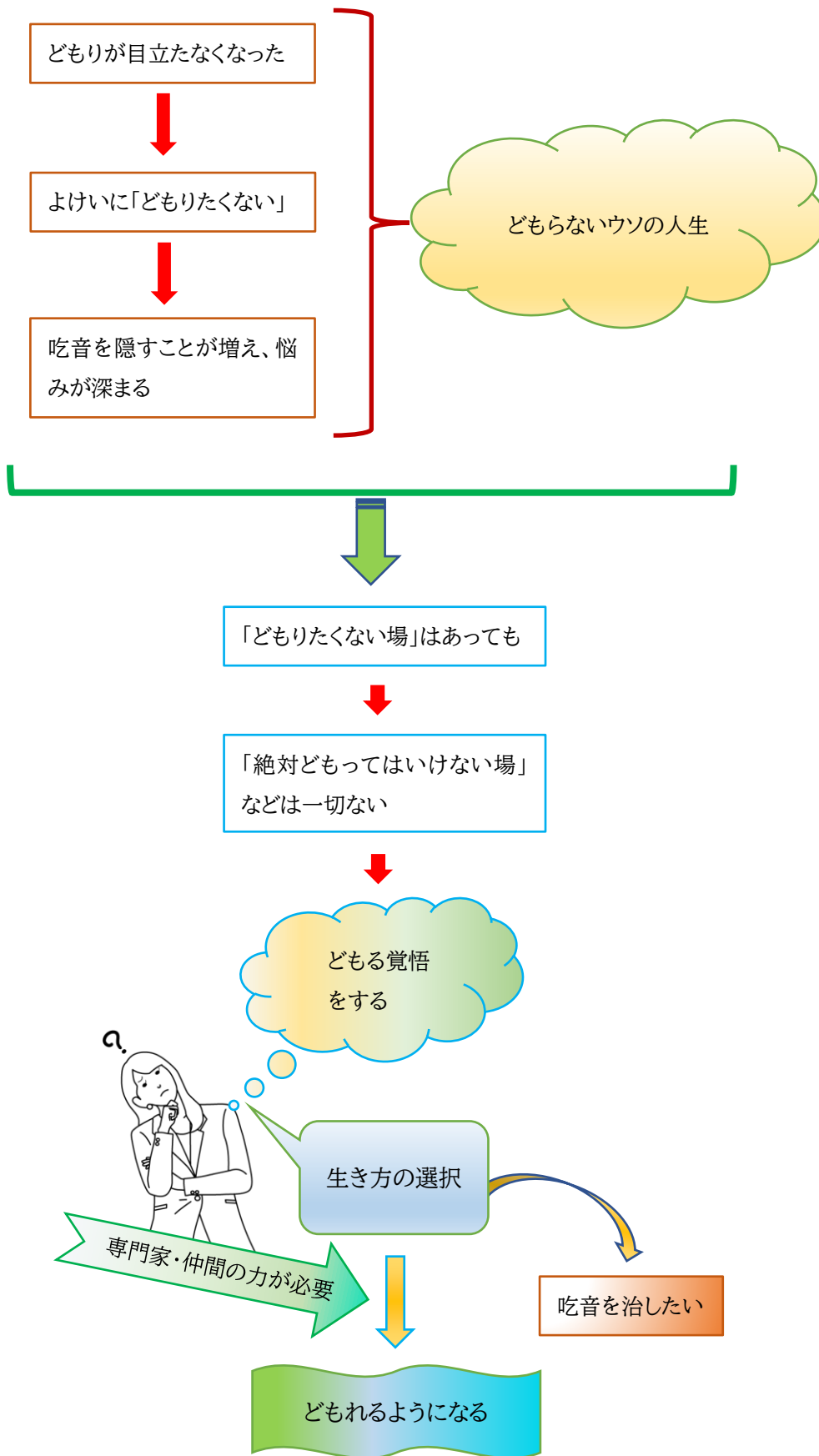


③ 劣等コンプレックスに陥り、人生の課題から逃げる人

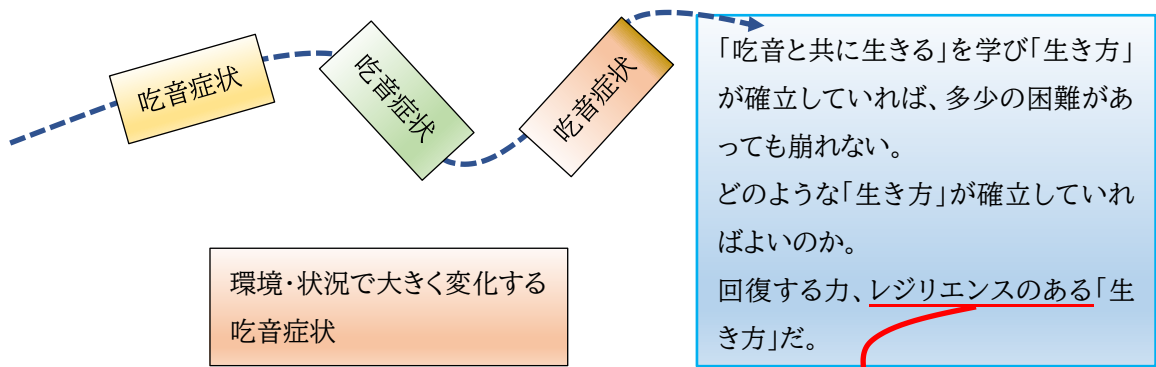
劣等感是谁にもあるが、あまりにも大きくなると、劣等コンプレックスに陥る。人生の課題である仕事、人間関係、愛から逃げる。



№10 どもれないのがどもる人の悩み(P49)



№11 再発する言語訓練ではなく、生き方を学ぶ(P51)

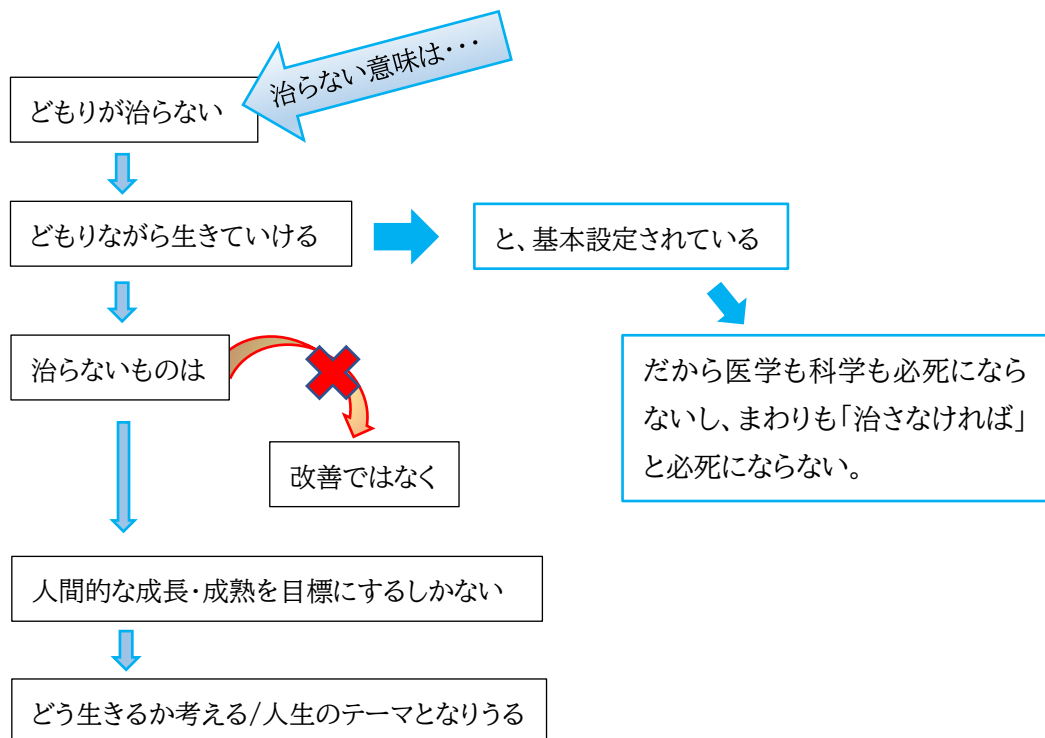


レジリエンスがあるとは、(P66)
 「心的外傷となる可能性のあった苦難から、新しい力で生き残る能力、回復力があること」

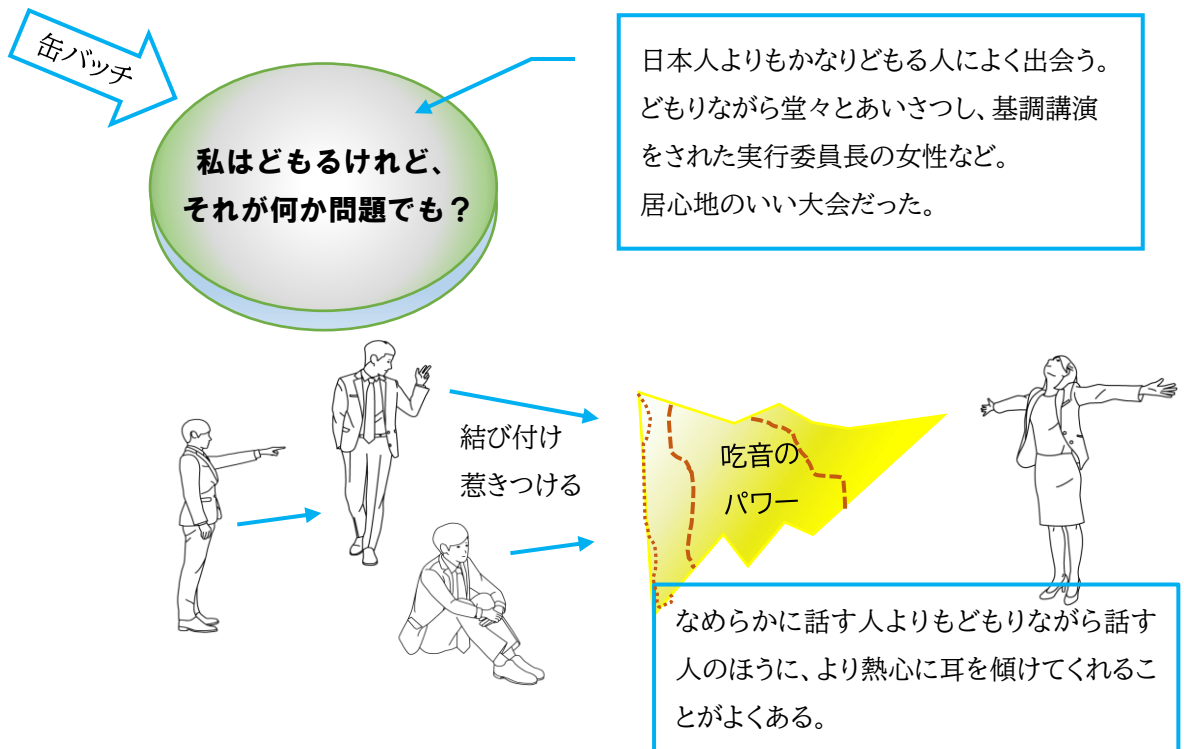
吃音に関連付けた7つの構成要素

洞察 吃音の問題の影響について考え、理解する。
独立性 吃音に支配されず、自分が人生の主人公になる。
関係性 親密で満足のできる人間関係。人と結びつき、人を大切にする、人間への信頼。
イニシアティブ 問題に立ち向かい、自分を主張し、自分が生きやすい環境に変える。
創造性 日記や絵画、音楽など自分を表現するプロセスが、新しいものを創造する。
ユーモア 自分の欠点や弱点を他人事のように笑い飛ばし、自分の嫌な気分を開放する。
モラル 充実したよりよい人生を送りたいという希望をもつ。

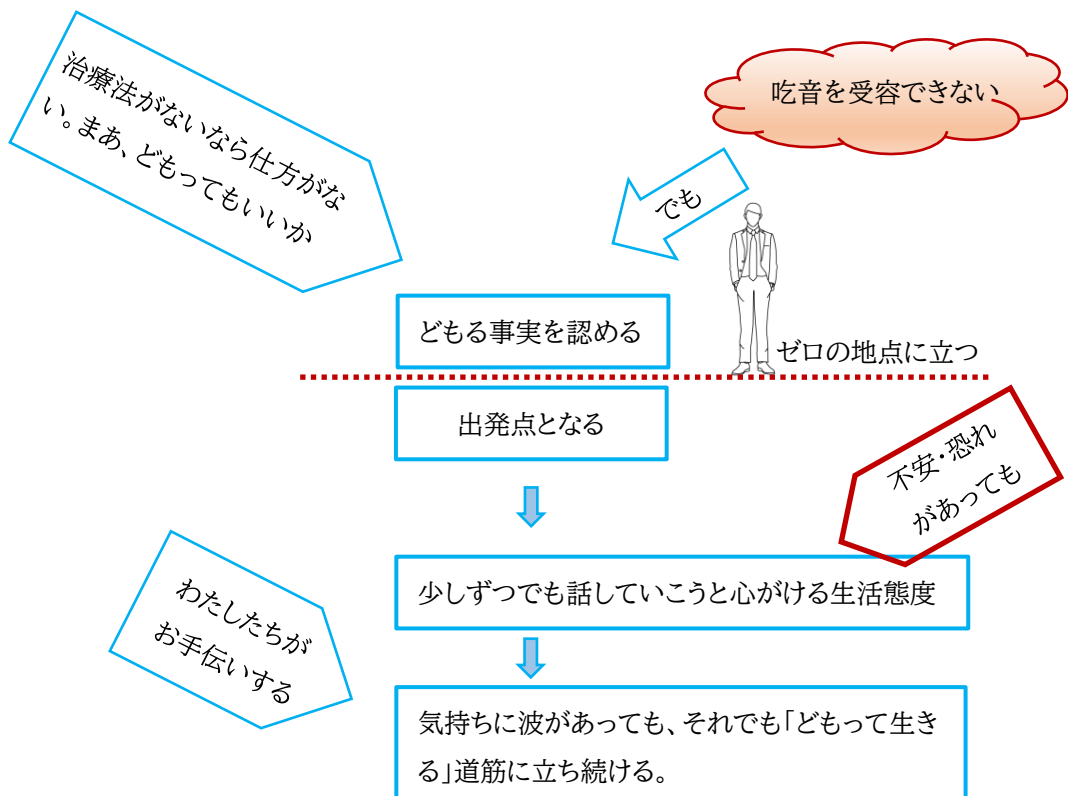
№12 どもりが治らないことの意味(P51)



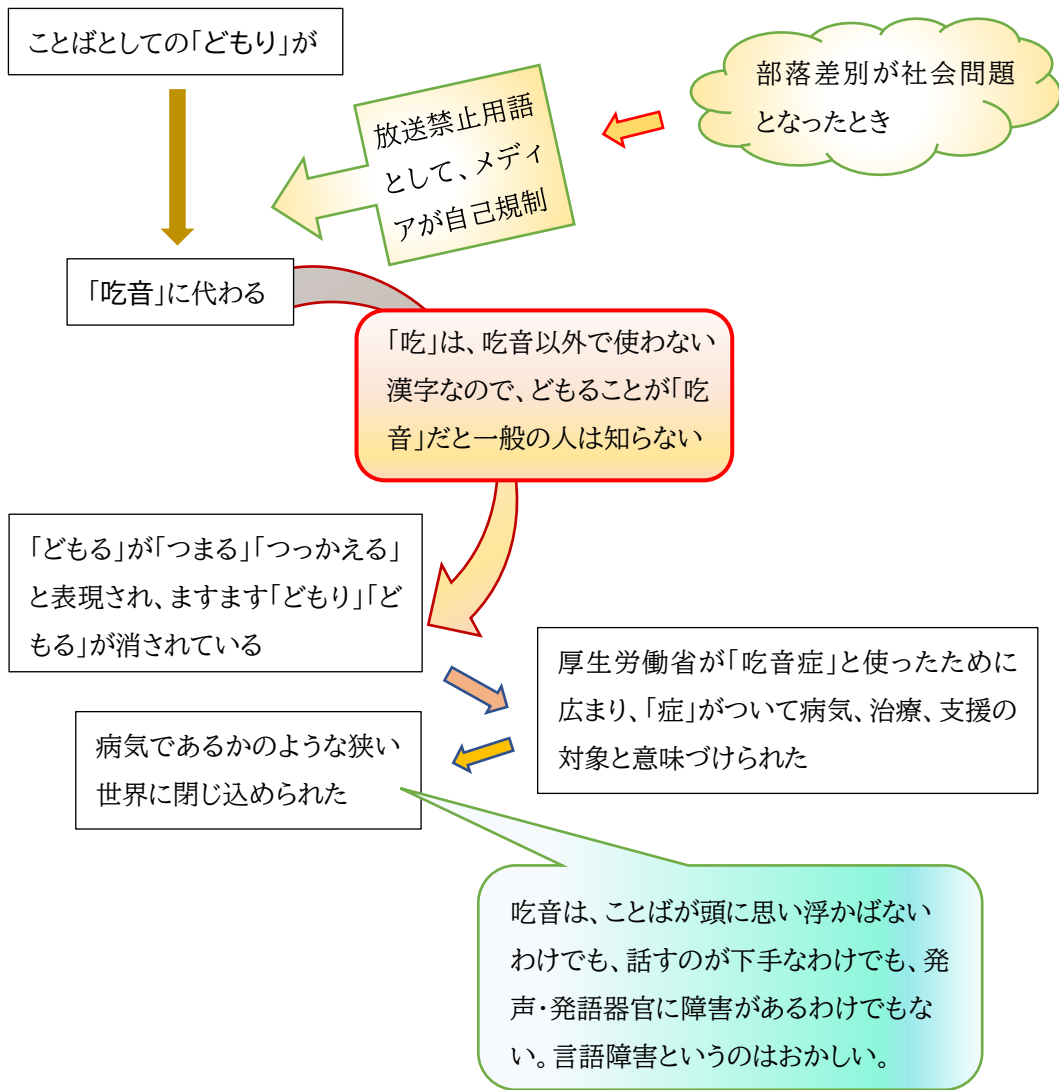
№13 どもる人の世界大会では、どもる声が響いていた(P52)



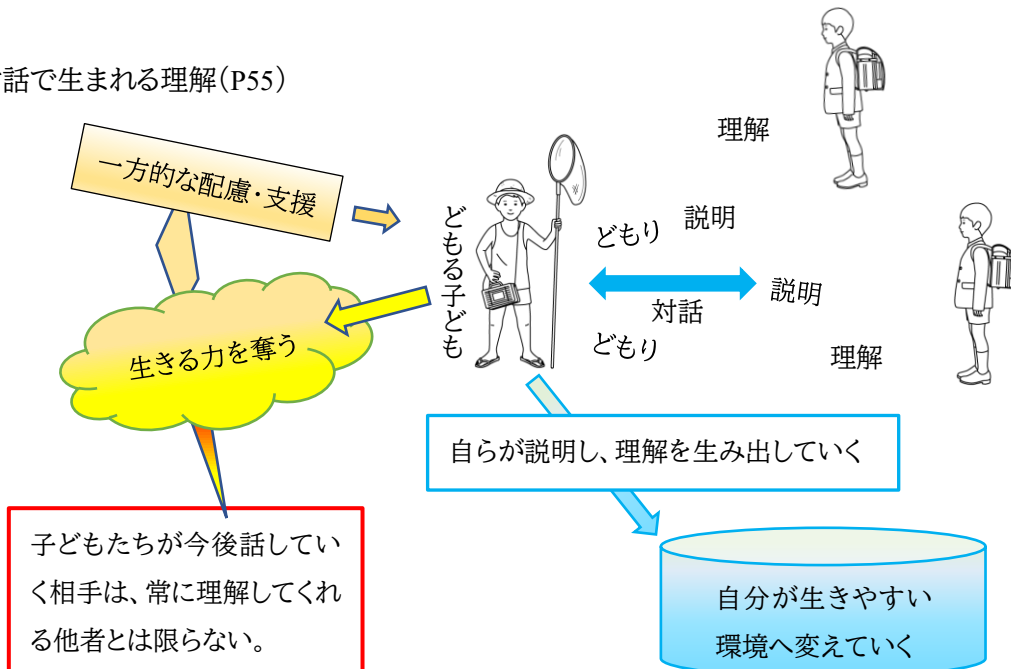
№14 難しい「障害受容」(P53)



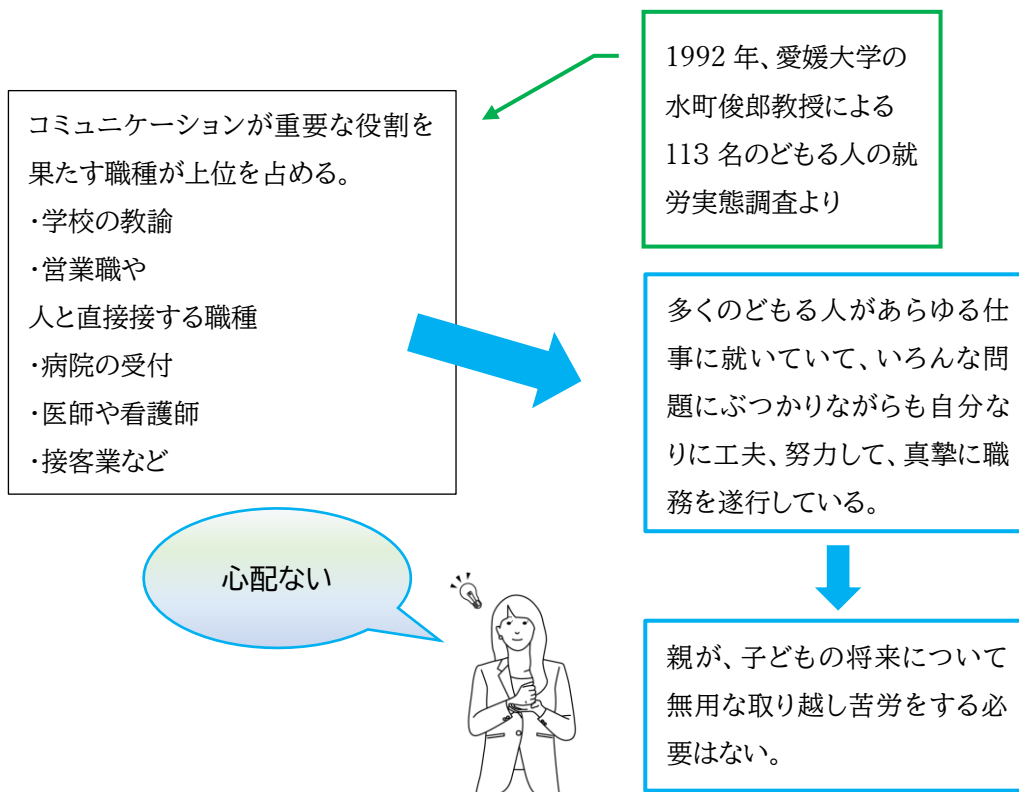
№15 どもり、吃音、「吃音症」(P54)



№16 対話で生まれる理解(P55)



№17 どもる人の就労の実態 (P56)



①水町教授が調査した当時、自分の人生は自分の力で切り開くのだという気概がどもる人にあったと思うが、これが安易な方向へと流れてしまわないかが心配だ。
 (発達障害支援法に吃音が入り、障害者手帳の発行による就労支援)

②今のどもる状態でこれからのことを考えるのではなく、できるだけ自分のしたい仕事に就いてほしい。

吃音を否定し、どもりたくないと思えば思うほどどもり、吃音を治そうと闘えば闘うほど、自分の人生を生きることができなくなる。吃音に悩んだ多くの人々は、遅かれ早かれ、吃音が治らない、吃音が治せない現実に向き合い、折り合いをつけて生きようになる。

吃音に悩む子どものレジリエンスを信じ

「吃音を治す・改善する」ではなく

「子どもの生きる力」を育てていくことが、私自身のこれまでの七十年の吃音人生を振り返り、出会ってきた人々の人生を重ね合わせ、吃音について、さまざまな領域から学んできた結論です。